



## 一杯のかけそば～栗 良平～

校長 田中 俊光

「この物語は、今から15年ほど前の12月31日、札幌の街にあるそば屋「北海亭」での出来事からはじまる」。1988年5月に初版が発行された、栗 良平 作の「一杯のかけそば」です。胸を打つ作品で、涙なしには読めません。今回の校長だよりでは、途中まで紹介します。

### 「一杯のかけそば」

栗 良平

そば屋にとっていちばんのかき入れどきは大晦日である。

北海亭もこの日ばかりは朝からてんでこまいの忙しさだった。いつもは夜の12時すぎまでにぎやかな表通りだが、夕方になるにつれて、家路につく人々の足もはやくなり、10時をまわると北海亭の客足もぱったりと止まる。

ころあいを見計らって、人はいいのだが無愛想な主人にかわって、常連客から女将さんと呼ばれているその妻は、忙しかった一日をねぎらう大入袋と土産のそばを持たせてパートタイムの従業員を帰した。

最後の客が店を出たところで、そろそろ表の暖簾を下げようかと話をしていたとき、入り口の戸がガラガラガラと力なく開いて、二人の子どもを連れて女性が入ってきた。6歳と10歳くらいの男の子は、真新しい揃いのトレーニングウェア姿で、女性は季節はずれのチェックの半コートを着ていた。

「いらっしやいませ！」

と迎える女将に、その女性はおずおずと言った。

「あのー……かけそば……一人前なのですが……よろしいでしょうか」

後ろでは、二人の子どもたちが心配顔で見上げている。

「えっ……ええどうぞ。どうぞこちらへ」

暖房に近い二番テーブルへ案内しながら、カウンターの奥に向かって、

「かけ一丁！」

と声をかける。それを受けた主人は、チラリと三人連れに目をやりながら、

「あいよっ！ かけ一丁！」

とこたえ、玉そば一個と、さらに半個を加えてゆでる。

玉そば一個で一人前の量である。客と妻に悟られぬサービスで、大盛りの分量のそばがゆであがる。

テーブルに出された一杯のかけそばを囲んで、額を寄せあって食べている三人の話し声が、カウンターの中までかすかに届く。

「おいしいね」

と兄。

「お母さんもお食べよ」

と一本のそばをつまんで母親の口に持っていく弟。やがて食べ終え、150円の代金を支払い、「ごちそうさまでした」と頭を下げて出て行く母子三人に、「ありがとうございます！ どうかよいお年を！」と声を合わせる主人と女将。

新しい年を迎えた北海亭は、あいかわらずの忙しい毎日の中で一年がすぎ、再び12月31日がやってきた。

前年以上の猫の手も借りたいような一日が終わり、10時を過ぎたところで、店を閉めようとしたとき、ガラガラガラと戸が開いて、二人の男の子を連れて女性が入ってきた。

女将は女性の来ているチェックの半コートを見て、一年前の大晦日、最後の客を思い出した。

「あのー……かけそば……一人前なのですが……よろしいでしょうか」

「どうぞどうぞ。こちらへ」

女将は、昨年と同じ二番テーブルへ案内しながら、「かけ一丁！」

と大きな声をかける。

「あいよっ！ かけ一丁」

と主人はこたえながら、消したばかりのコンロに火を入れる。

「ねえお前さん、サービスということで三人前、出してあげようよ」

そっと耳打ちする女将に、

「だめだ。そんな事したら、かえって気をつかうべ」と言いながら玉そば一つ半をゆであげる夫を見て、

「お前さん、仏頂面してるけど、いいところあるね」と微笑む妻に対し、あいかわらず黙ってどんぶりに盛り付けをする主人である。

テーブルの上の、一杯のそばを囲んだ母子三人の会話が、カウンターの中と外の二人に聞こえる。

「……おいしいね……」

「今年も北海亭のおそば食べれたね」

「来年も食べれるといいね……」

食べ終えて、150円を支払い、出て行く三人の後ろ姿に、

「ありがとうございます！ どうかよいお年を！」

その日、何十回とくり返した言葉で送り出した。

商売繁盛のうちに迎えた翌年の大晦日の夜、北海亭の主人と女将は、たがいに口にこそ出さないが、9時半をすぎたころより、そわそわと落ち着かない。

10時をまわったところで従業員を帰した主人は、壁に下げてあるメニュー札を次々と裏返した。今年の夏に値上げして「かけそば200円」と書かれていたメニュー札が、150円に早変わりしていた。

二番テーブルの上には、すでに30分も前から「予約席」の札が女将の手で置かれている。

10時半になって、店内の客足がとぎれるのを待っていたかのように、母と子の三人連れが入ってきた。

兄は中学生の制服、弟は去年兄が着ていた大き目のジャンパーを着ていた。二人とも見違えるほどに成長していたが、母親は色あせたあのチェックの半コート姿のままだった。

「いらっしやいませ！」

と笑顔で迎える女将に、母親はおずおずと言う。

「あの一……かけそば……二人前なのですが……よろしいでしょうか」

「えっ……どうぞどうぞ。さあこちらへ」

と二番テーブルへ案内しながら、そこにあった「予約席」の札を何気なく隠して、カウンターに向かつて、

「かけ二丁！」

それを受けて、「あいよっ！ かけ二丁！」

とこたえた主人、玉そば三個を湯の中にほうり込んだ。

二杯のかけそばをたがいに食べあう母子三人の明るい笑い声が聞こえ、話も弾んでいるのがわかる。カウンターの中で、思わず目と目を見かわして微笑む女将と、例の仏頂面のまま、ウンウンとうなづく主人である。

「お兄ちゃん、淳ちゃん……今日は二人に、お母さんからお礼が言いたいの」

「……お礼って……どうしたの」

「実はね、死んだお父さんが起こした事故で、8人もの人にけがをさせ迷惑をかけてしまったんだけど……保険などでも支払いできなかった分を、毎月5万円ずつ払い続けていたの」

「うん、知っていたよ」

と兄と主人は、身動きしないで、じっと聞いている。

「支払いは年明けの3月までになっていたけど、実は今日、ぜんぶ支払いを済ませることができたの」

「えっ！ ほんとう、お母さん！」

「ええ、ほんとうよ。お兄ちゃんは新聞配達をしてがんばってくれてるし、淳ちゃんがお買い物や夕飯のしたくを毎日してくれたおかげで、お母さん安心して働くことができたの。よくがんばったからって、会社から特別手当をいただいたの。それで支払いを

ぜんぶ終わらすことができたの」

「お母さん！ お兄ちゃん！ よかったね！ でも、これからも、夕飯のしたくはボクがするよ」

「ボクも新聞配達、続けるよ。淳！ がんばろうな！」

「ありがとうございます。ほんとうにありがとうございます」

「今だから言えるけど、淳とボク、お母さんに内緒にしている事があるんだ。それはね……11月の日曜日、淳の授業参観の案内が、学校からあったでしょう。……あのとき、淳はもう一通、先生からからの手紙をあずかってきてたんだ。

淳の書いた作文が北海道の代表に選ばれて、全国コンクールに出品されることになったので、参観日に、その作文を淳に読んでもらおうって。

先生からの手紙をお母さんに見せれば……むりして会社を休むのわかるから、淳、それを隠したんだ。そのこと淳の友だちから聞いたものだから……ボクが参観日に行ったんだ」

「そう……そうだったの……それで」

「先生が、あなたは将来どんな人になりたいですか、という題で、全員に作文を書いてもらいましたところ、淳くんは一杯のかけそばという題で書いてくれました。これからその作文を読んでもらいますって。

一杯のかけそばって聞いただけで、北海亭のことだとわかったから……淳のヤツなんでそんな恥ずかしいことを書くんだった！ と心の中で思ったんだ。

作文はね……お父さんが、交通事故で死んでしまい、たくさんの借金が残ったこと、お母さんが、朝早くから夜遅くまで働いていること、ボクが朝刊夕刊の配達に行っていることなど……ぜんぶ読みあげたんだ。

そして12月31日の夜、三人で食べた一杯のかけそばが、とてもおいしかったこと。……三人でたった一杯しか頼まないのに、おそば屋さのおじさんとおばさんは、ありがとうございます！ どうかよいお年を！ って大きな声をかけてくれたこと。その声は……負けるなよ！ がんばれよ！ 生きるんだよ！ って言っているような気がしたって。

それで淳は、大人になったら、お客さんに、がんばってね！ 幸せにね！ って思いをこめて、ありがとうございます！ と言える日本一の、おそば屋さんになりますって、大きな声で読みあげたんだよ」

カウンターの中で、聞き耳を立てていたはずの主人と女将の姿が見えない。

カウンターの奥にしゃがみこんだ二人は、一本のタオルの端をたがいに引っ張りあうようにつかんで、こらえきれずあふれでる涙を拭っていた。

…

（「栗良平作品集2—一杯のかけそば・ケ坊とサタクロース  
栗っ子の会）